Tones in South-Min Dialects of Eastern Guangdong : An Overview of Monosyllabic Tone and Tone sandhi

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/43375

人間社会環境研究　第30号　2015. 9

広東東部閩南語における声調
－単音節声調と連読変調（Tone sandhi）の概観－

人間社会環境研究科　人間社会環境学専攻
黄　　綺　燁

要旨

閩南語は主に福建，台湾で話される有力な漢語方言であるが，広東東部の潮州，汕頭地域（以下「潮汕」と呼ぶ）にも分布している。閩南語には豊かな連読変調（Tone sandhi）現象があることが知られているが，潮汕地域のそれは他の閩南語とは異なる独自の特徴があり，地理的変異が多い。しかし，従来は記述研究が不十分であった。本稿は昨年実施した方言調査の結果を報告する。単音節声調と二音節語声調それぞれについて，声調調類と調値の関係を考慮しながら記述し，類型化を試みる。

キーワード

連読変調，閩南語，潮汕方言，類型，地理的分布

Tones in South-Min Dialects of Eastern Guangdong
－An Overview of Monosyllabic Tone and Tone sandhi

HUANG Qiye

Abstract

The South-Min Dialect is an influential Chinese dialect that is mainly spoken in China's Fujian Province and in Taiwan. It is also found in Chaozhou and the Shantou region of eastern Guangdong (this version of the dialect is hereafter referred to as the "Chaoshan dialect"). It is well known that tone sandhi phenomena are rich in South-Min Dialects, but the Chaoshan dialect has its own characteristics, which are different from those of other South-Min Dialects and are geographically diversified. Previous dialect research in this region has been insufficient. To rectify this issue, this paper presents the results of a dialect survey that I carried out last year. The paper describes and typologizes monosyllabic tones and tones of disyllabic words, and considers the relationship between tone categories and tone values.

Keywords

Tone sandhi, South-Min Dialect, Chaoshan dialect, Typology, Geographical distribution

1．はじめに

閩南語は主に福建，台湾で話される有力な漢語方言であるが，広東東部の潮州，汕頭地域（以下「潮汕」と呼ぶ）にも分布している。本稿は潮汕方言の声調について報告する。対象は単音節声調のほか，連読変調を含む。

連読変調（Tone sandhi）とは，声調が多音節の音声単位（単語，複合語又はフレーズ）の中で特定の規則に従って変化する現象である。北京語におけるTone 3変調（“Tone”は以下“T”と略す）は有名な連読変調である。T3とT3が連続する時，先行するT3がT2になる。このように，北京語の変調は，隣接する声調の影響を受ける(context-dependent)。これに対して，本稿が扱う閩南語の変調は，隣接する声調の影響を受けない（context-free)。

閩南語は“Tone clock”と呼ばれる連鎖的な声調交替を示すことで知られているが，潮汕方言の変調は他の閩南語とは異なる独自の特徴があり，地理的変異が多い。しかし，従来は記述研究が不十分であった。

主な先行研究として，「潮陽方言的連読変調」(張，1979，1980)，「潮州話的声調」(張，1989)，「潮汕方言声調研究」(林，1995）などがある。これらの研究は，一地点又は数地点を対象とした記述研究であるため，今後に残された課題がある。第一に，潮汕全域の調査研究である。第二に，連読変調の本質と変化の過程を解明することである。

この研究を進めるための第一歩として，筆者は2014年８月に，汕頭市内・潮州市内・汕尾市内など９地点に赴き，10名の話者を調査した。

2．　調査地域，調査内容・方法

(1) 調査地域

今回の調査地点は，地図Ⅰに示すように，潮汕地域（潮州市，汕頭市，揭揚市，汕尾市という四つの市を含む）のうち９地点である。それは，潮州市内，潮州市潮安区東鳳鎮（以下「東鳳鎮」と呼ぶ)，汕頭市澄海区内（以下「澄海区内」と呼ぶ)，汕頭市内，揭陽市榕城区砲台鎮（以下「砲台鎮」と呼ぶ)，揭陽市内，汕頭市潮南区隴田鎮（以下「隴田鎮」と呼ぶ)，揭揚市普寧市内[1]（以下「普寧市内」と呼ぶ)，汕尾市内である。なお，汕尾市内では後寮鎮と漁村という２地点に赴いた。後寮鎮は非沿海地域に属し，漁村は沿海地域に属する。しかし，この２地点での単音節声調と二音節語における変調状況はほぼ同じであるため，本稿では一地点（汕尾市内）として扱う。

地域内の主な河川は，韓江，榕江，練江，螺河，黄江の五つがある。次に挙げる地図Ⅰ，地図Ⅱを参照されたい。潮州市内，東鳳鎮，澄海区内は韓江の河岸にある。揭揚市内，砲台鎮，汕頭市内は榕江の河岸にある。普寧市内，隴田鎮は練江の河岸にある。また，汕尾市周辺地域の主な河川は，螺河と黄江である。

潮汕地域は，おおよそ東北部（経済的な発展地域）と西南部（未発展地域）という二つの部分に分けられる。東北部は韓江流域と榕江流域であり，西南部は練江流域と螺河・黄江流域である。

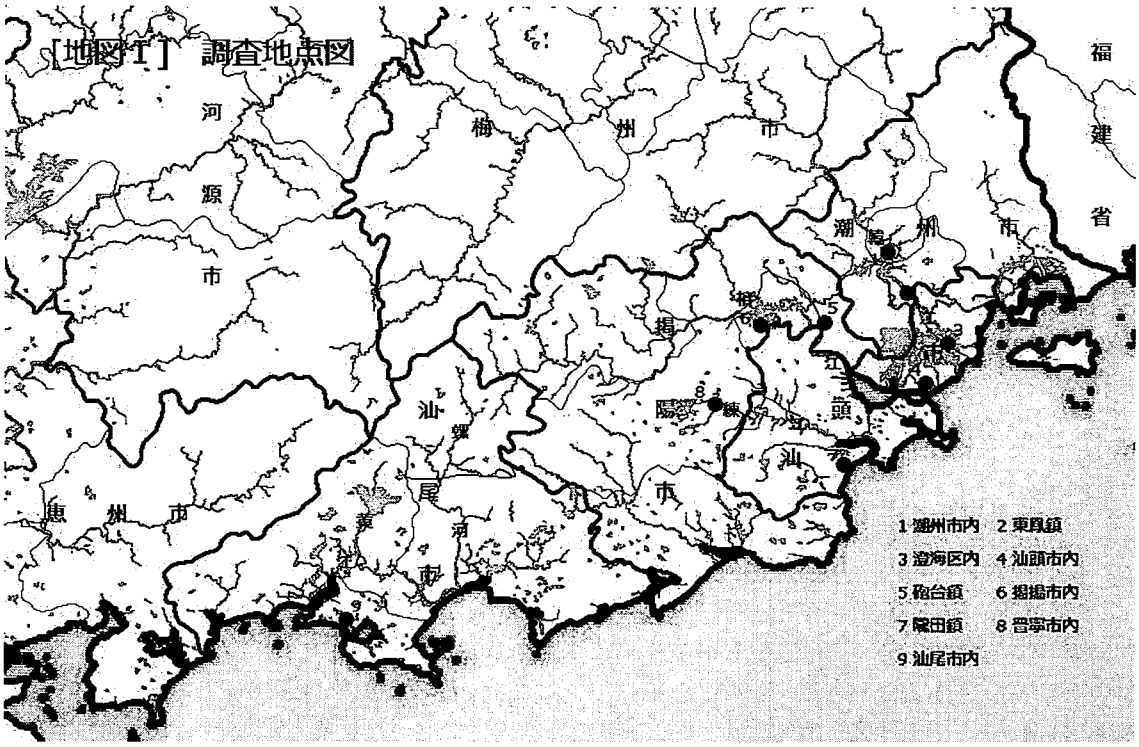
東北部には汕頭市，潮州市，揭揚市の一部がある。汕頭市内と潮州市内という二大中心都市についての方言研究は多い。また，研究者が注目している地域は，潮陽区（汕頭市に属する）と揭揚市である。

西南部の中心地は汕尾市と普寧市（揭揚市に属する）である。この地域の言語研究が足りない。一つの先行研究は，「海豊方言詞典」(羅，2000）である。この辞書は，汕尾市に属する海豊県という地点の連読変調についても簡単な描写をしている。

(2) 調査内容・方法

主な調査内容は，多音節語（主に二音節語と三音節語）における連読変調現象である。

調査方法は，漢字で書かれた調査票を読ませる調査のほか，基礎語彙調査を通じて自然発話に現れた声調の特徴を観察した。



地図Ⅰ　調査地点図

表一　単音節声調

地点番号	類 型	調査地点	陰平 T1	陽平 T2	陰上 T3	陽上 T4	陰去 T5	陽去 T6	陰入 T7	陽入 T8
1	α	潮州市内	33	55	42	35	212	11	2	5
2		東鳳鎮	33	45	53	35	213	11	2	5
3		澄海区内	33	45	53	35	213	11	2	5
4		汕頭市内	33	55	53	35	213	11	2	5
5		砲台鎮	33	55	42	35	212	11	2	5
6		揭陽市内	33	55	42	24	212	11	2	5
7	β	隴田鎮	21	55	52	52	31	11	32	54
8	γ	普寧市内	33	44	52	212	212	11	32	54
9	α	汕尾市内	33	55	53	35	212	11	1	5

3．単音節声調

まず，単音節声調について説明する。

本稿で使用する表記法は，五度式表記法と呼ばれ，声の高さを1，2，3，4，5の数字（1が最低，5が最高）で示す方法である。通常は，二つ又は三つの数字の組み合わせによってピッチの変動を示す。たとえば，[33]，[212]。音節の長さが短い場合は，一つの数字で表すか，又は数字に下線を付けて示す。たとえば，[2]，[32]。

表一は単音節声調を示したものである。

9つの調査地点は，調値によって三つのタイプに分類することができる。

(1) αタイプ

αタイプは八声調であり，潮汕地域で最も広く分布している。調査地点のうち，潮州市内・東鳳鎮・澄海区内・汕頭市内・砲台鎮・揭揚市内・汕尾市内の７地点はαタイプである。各地点の調値に顕著な差異はない。T2で［55］/［45］，T3で［42］/［53］，T4で［35］/［24］，T5で［212］/［213］，T7で［2］/［1］のような差異が現われるが，同一方言内で［55］/［45］のような音韻対立（phonological opposition）が存在するわけではないので，このような差異は分類上捨象してよいと思われる。

調型で言えば，平板調，下降調，上昇調，曲折調，短促調という五種類がある。

(2) βタイプ

βタイプは七声調である。今回の調査では隴田鎮１地点のみにみられた。具体的な分布状況は未だ不明である。平板調，下降調，短促調という三種類の調型があり，上昇調と曲折調がない点に特徴がある。また，下降調には［21］，［31］，［52］という三種類がある。

(3) γタイプ

γタイプも七声調である。今回の調査では普寧市内１地点のみにみられた。具体的な分布状況は未だ不明である。調型は平板調，下降調，曲折調，短促調という四種類があり，上昇調がない。また，平板調に［11］，［33］，［44］という三種類があることが注目される。

上述した三つのタイプを比べると，以下のような差異が現れる。

① αタイプとβタイプの差

調類と調値の関係から見ると，T1とT5の調値が顕著に異なる。

	T1	T5
α	［33］	［212］～［213］
β	［21］	［31］

また，βタイプではT3とT4が合流している。

	T3		T4
α	［53］～［42］		［35］
β	［52］	=	［52］

T7，T8（入声）はαタイプとβタイプで若干の音声的差異が現われる。αタイプではそれぞれ低短促調，高短促調であるが，βタイプでは音節長がやや長く，ピッチの緩い下降がみられる。

② αタイプとγタイプの差

γタイプではT4とT5が合流している。

	T4		T5
α	［35］		［212］～［213］
γ	［213］	=	［213］

これはαタイプとγタイプの顕著な区別である。しかし，二音節語における変調では，γタイプのT4とT5との間で差異が現われる（下文第４節のDタイプ参照）。

③ βタイプとγタイプの差

T2，T3，T6，T7，T8の調値はほぼ相同であり，異なるのはT1，T4，T5である。βタイプのT1は他のタイプと違い，［21］であるが，二音節語における変調では他のタイプと同じく［33］が実現される（下文第４節のCタイプ参照）。

また，上述のように，βタイプではT3とT4が合流し，γタイプではT4とT5が合流するため，この二つのタイプは同じく七声調であるが，調類と調値の対応関係が異なる。

	T3		T4		T5
β	［52］	=	［52］		［31］
γ	［52］		［212］	=	［212］

4．二音節語における変調

潮汕方言のTone sandhiは，次の特徴がある。

(1) 末位音節では変調せず，非末位音節で変調する。

(2) 北京語とは異なり，隣接する声調の影響を受けない。つまり，音声的な文脈の制約がない（context-free）。

(3) 主に範疇的な（categorical）声調交替をする。つまり，単音節声調Aが非末位音節で別の単音節声調Bに交替する。

(4) 声調交替には二形態がある。一つはA→B→C…のような連鎖式交替（chain shift），もう一

つはA，B→C又はA，B→Bのような声調中和である。中和とは，二つ以上の音素の対立がある条件の下で消失することであり，通時的な合流の結果である。潮汕方言では，中和の出力（output）がA，B→Cのように入力（input）と異なる場合と，A，B→Bのように入力のいずれかと一致する場合がある。

今回の調査は，八つの声調の組み合わせる例（合計64個）を列挙し，二音節語における変調を観察した。以下は，汕頭市内を例として一つずつを挙げる。

T1+T1	剪刀	ka to	はさみ
T1+T2	天时	tʰĩ si	天気
T1+T3	山顶	sũã teŋ	山の頂
T1+T4	新妇	sim pu	息子の嫁
T1+T5	衫裤	sã kʰou	着物
T1+T6	衫袋	sã to	ポケット
T1+T7	冬节	taŋ tsoiʔ	冬至
T1+T8	虼蚻	ka tsuaʔ	ゴキブリ
T2+T1	头家	tʰau ke	店の経営者
T2+T2	眠床	miŋ tshɯŋ	ベッド
T2+T3	年尾	nĩ bue	年末
T2+T4	流涎	lau nũã	よだれを垂らす
T2+T5	长裤	tɯŋ kʰou	長ズボン
T2+T6	红豆	aŋ tau	あずき
T2+T7	蚝烙	o luaʔ	カキいりオムレツ
T2+T8	鹅肉	ŋo nek	ガチョウの肉
T3+T1	水鸡	tsui koi	蛙
T3+T2	粿条	kue tiau	ライスヌードル
T3+T3	□鼠	ŋiau tsʰɯ	ネズミ
T3+T4	手电	tsʰui tiaŋ	懐中電灯
T3+T5	起厝	kʰi tsʰu	家を建てる
T3+T6	洗面	soi meŋ	顔を洗う
T3+T7	手□	tsʰui lap	手袋
T3+T8	草席	tsʰau tsʰiok	筵
T4+T1	后生	hau sẽ	若い
T4+T2	卵仁	nɯŋ dziŋ	卵黄
T4+T3	耳屎	hĩ sai	耳垢
T4+T4	□卵	kũã nɯŋ	卵を持つ
T4+T5	下□	e kua	午後
T4+T6	项链	am liaŋ	ネックレス
T4+T7	两只	no tsiak	二つ
T4+T8	企直	kʰia tik	ちゃんと立つ
T5+T1	臭酸	tsʰau sɯŋ	腐る
T5+T2	菜头	tsʰai tʰau	大根
T5+T3	戏囝	hi kĩã	役者
T5+T4	呸涎	pʰui nũã	よだれを吐く
T5+T5	裤带	kʰou tua	ズボンの帯
T5+T6	清饭	tsʰiŋ puŋ	残飯
T5+T7	跳索	tʰiau sok	縄跳びをする
T5+T8	到日	kau dzik	一日中
T6+T1	豆干	tau kũã	豆腐干
T6+T2	豉油	si iu	醤油
T6+T3	面粉	mi huŋ	小麦粉
T6+T4	大舅	tua ku	母の姉（一番上の姉）の夫
T6+T5	豆酱	tau tsĩõ	中国風味噌
T6+T6	地豆	ti tau	ピーナッツ
T6+T7	面色	meŋ sek	顔色
T6+T8	大石	tua tsiok	大きな石
T7+T1	□熏	kuʔ huŋ	タバコを吸う
T7+T2	□□	tʰik tʰo	遊ぶ
T7+T3	竹笋	tek suŋ	竹の子
T7+T4	烙卵	luaʔ nɯŋ	目玉焼き
T7+T5	□啄	tsʰek tsʰui	口を拭く
T7+T6	□鼻	hŋʔ pʰĩ	はなをかむ
T7+T7	扑克	pʰok kʰiok	トランプ
T7+T8	乞食	kʰɯk tsiak	乞食
T8+T1	木工	bak kaŋ	大工
T8+T2	日头	dzik tʰau	太陽
T8+T3	蚀本	siʔ puŋ	欠損する
T8+T4	月内	gueʔ lai	産後のひと月
T8+T5	白菜	pek tsʰai	白菜
T8+T6	食饭	tsiaʔ puŋ	ご飯を食べる
T8+T7	目汁	mak tsap	涙
T8+T8	独目	tok mak	独眼の人

表二は二音節語における非末位音節の変調状況である。五つのタイプに分類することができる。Aタイプは，潮州市内と東鳳鎮である。Bタイプは，澄海区内・汕頭市内・砲台鎮・揭揚市内であ

表二　二音節語における変調　非末位音節

地点番号	類型	調査点	陰平 T1	陽平 T2	陰上 T3	陽上 T4	陰去 T5	陽去 T6	陰入 T7	陽入 T8
1	A	潮州市内	33	55>212	42>24	35>21	212>42	11	2>5	5>2
2		東鳳鎮	33	45>213	53>24	35>21	213>53	11	2>5	5>2
3	B	澄海区内	33	45>11	53>35	35>21	213>42	11	2>5	5>2
4		汕頭市内	33	55>11	53>35	35>21	213>53	11	2>5	5>2
5		砲台鎮	33	55>11	42>24	35>21	212>42	11	2>5	5>2
6		揭陽市内	33	55>11	42>24	24>21	212>42	11	2>5	5>2
7	C	隴田鎮	21>33	55>33	52>31	52>13	31>35	11>13	32>54	54>32
8	D	普寧市内	33	44>33	52>31	212>33	212>44	11>33	32>54	54>32
9	E	汕尾市内	33	55>11	53>35	35>33	212>55	11>33	1>5	5>1

る。Cタイプは，隴田鎮である。Dタイプは，普寧市内である。Eタイプは，汕尾市内である。

各タイプの具体的な変調関係は，以下の通りである。

Aタイプ（潮州市内を例とする）

T1 [33]→T1 [33]（変調せず）

T6 [11]→T6 [11]（変調せず）

T2 [55]→T5 [212]→T3 [42]→T4 [35]→[21]

T7 [2] →T8 [5]

T8 [5] →T7 [2]

Bタイプ（汕頭市内を例とする）

T1 [33]→T1 [33]（変調せず）

T2 [55]，T6 [11]→T6 [11]

T5 [213]→T3 [53]→T4 [35]→[21]

T7 [2]→T8 [5]

T8 [5]→T7 [2]

Cタイプ

T1 [21]，T2 [55] → [33]

T4 [52]，T6 [11] → [13]

T3 [52] →T5 [31] → [35]

T7 [32] →T8 [54]

T8 [54] →T7 [32]

Dタイプ

T1 [33]，T2 [44]，T4 [212]，T6 [11]→T1[33]

T3 [52] → [31]

T5 [212] →T2 [44]

T7 [32] →T8 [54]

T8 [54] →T7 [32]

Eタイプ

T1 [33]，T4 [35]，T6 [11] →T1 [33]

T3 [53] →T4 [35]

T5 [212] →T2 [55] →T6 [11]

T7 [1] →T8 [5]

T8 [5] →T7 [1]

各タイプの具体的な変調関係を観察すると，次の特徴があることがわかる。

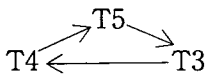
(1)　入声の変調は，全てのタイプで互換する。即ち，T7→T8，T8→T7のように，相互に範疇的交替をする。以下，本稿では，入声を考察の対象としない。

(2)　AタイプとBタイプの変調の一致性は高い。T1とT6は変調せず，T5→T3→T4→[21]という二つの共通点がある。AタイプとBタイプの違いは，T2の振る舞いにある。AタイプのT2（[55] 又は [45]）は，T5（[212] 又は [213]）と交替するが，BタイプのT2（[55] 又は [45]）は，T6 [11] と交替する。その結果，Aタイプでは，「T2→T5→T3→T4」のようなchain shiftが起きるが，Bタイプでは，T2，T6→T6のような中和が起きるため，T2は「T5→T3→T4」に組み込まれない。これはAタイプとBタイプの唯一の区別である。

T4 [35] はAタイプ，Bタイプいずれでも変調して [21] となるが，この調値は単音節声調には現われない。つまり非範疇的交替（non-categorical alternation）である。しかし，これ

はT5の単音節声調と似ており，筆者は［212］又は［213］の異音（条件変異）とみなす。即ち，単独では低曲折調が実現されるが，非末位では最後の上昇部分［2］が実現されないものと考える。北京語のT3が，単音節では［214］で実現されるが，非末位で［21］となるのと同じである。

仮にその解釈が成立するとすれば，T5→T3→T4→［21］はT5→T3→T4→T5になる。即ち，次のようなTone clockになっている。



(3) Cタイプ，Dタイプ，Eタイプでは，Aタイプ，Bタイプでみられた連鎖的交替が相対的に少なくなるが，代わって中和が多くなる。

Cタイプ（龍田鎮）

T1［21］，T2［55］→［33］

T4［52］，T6［11］→［13］

Dタイプ（普寧市内）

T1[33]，T2[44]，T4[212]，T6[11]→T1[33]

Eタイプ（汕尾市内）

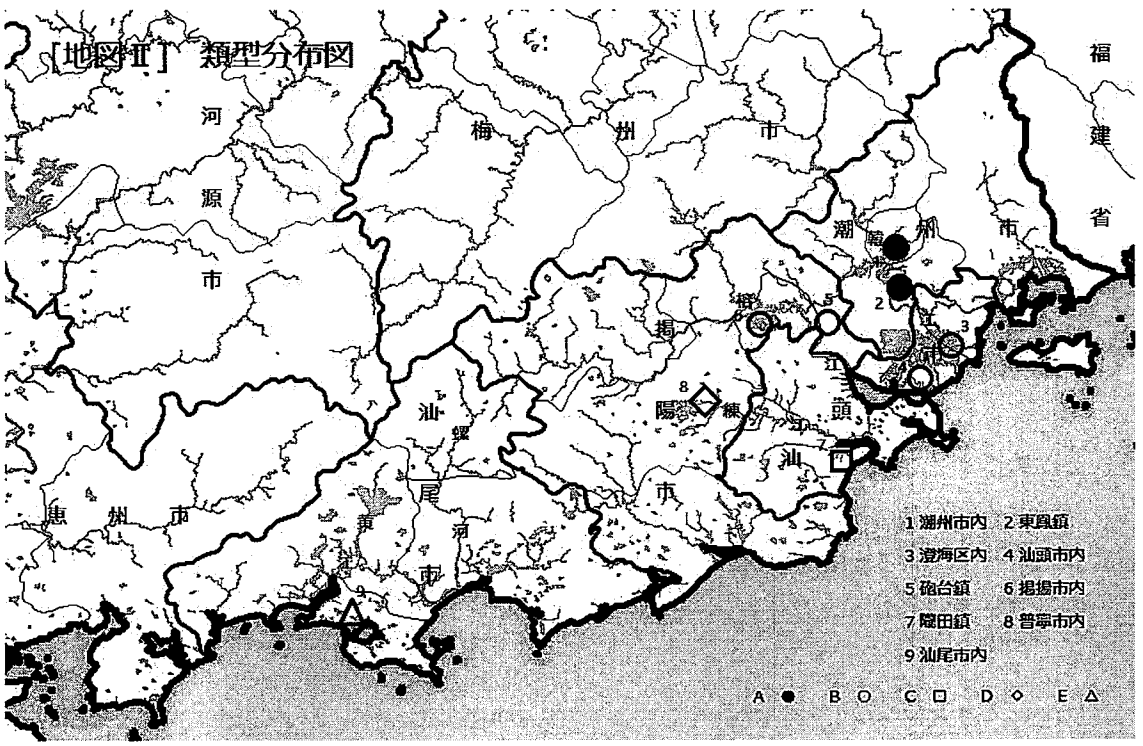
T1［33］，T4［35］，T6［11］→T1［33］

Cタイプにおける中和の出力［33］，［13］は非範疇的交替である。Dタイプでは，中和の結果，平板調の[33]が実現される頻度が高くなる。さらに，Eタイプは変調の出力が，T3［53］→T4［35］を除いて［11］，［33］，［55］という三つの平板調になり，平板化の傾向が強い。

また，CタイプとDタイプを比べて目につくのは，T3［52］→［31］という共通点である。しかし，Cタイプの［31］はT5であり，従って範疇的交替であるが，Dタイプの［31］は非範疇的交替である。

表二に基づき，地図Ⅱを描いた。

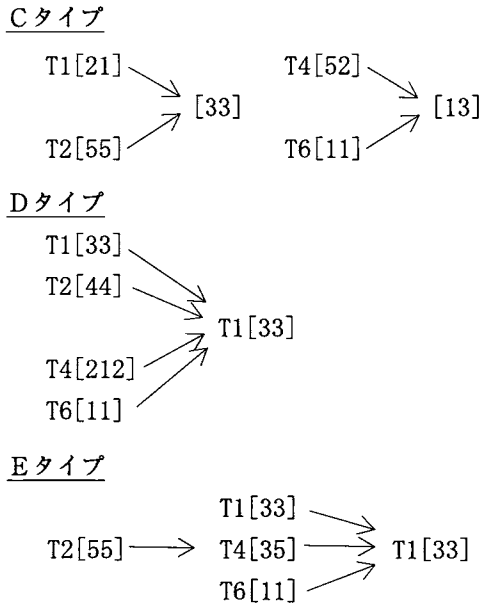
大雑把に言えば，Aタイプは韓江流域に分布しており，Bタイプは榕江流域に分布している。これら東北部の地域はTone clockが現れる傾向が



地図Ⅱ 類型分布図

強い。CタイプとDタイプは練江流域に分布しており，Eタイプは螺河・黄江流域に分布している。これら西南部の地域では，変調が調素の対立の中和をもたらす傾向がある。

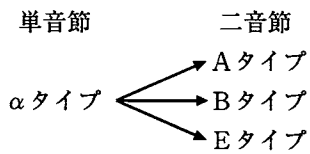
C，D，EタイプはA，Bタイプより，平板化又は中和が多い点で共通するが，各タイプはそれぞれ異なる特徴を示す。注目すべき点の一つは，T1，T2，T4，T6の変調である。この四つの声調は，変調後，主に［33］が実現されるが，具体的な表現は以下の通りである。



C，D，Eタイプの相互関係，及びそれらとA，Bタイプの関係については今後の検討課題としたい。

5．まとめ

上述した各タイプを観察すると，単音節声調の類型と二音節語における変調の類型には以下のような対応関係がある。



βタイプ ⟶ Cタイプ
γタイプ ⟶ Dタイプ

今回の調査では，東北部の六地点，西南部の三地点を調査したのみであり，特に西南部地域の調査地点が少ないため，現状では調査点の分布が不均衡である。また，現時点では調査地点が都市に偏っており，周辺農村部については調査が不十分である。変調の類型と単音節声調の類型の関係及び地理的分布との関係については，今後詳細な調査を行なうことによって確認したい。

6．おわりに

本稿では，単音節声調と非末位音節声調の変調を考察した。しかし，末位音節で変調がみられることもあり，その場合は特定の声調あるいは特定の単語においてのみ変調する。以下，例を挙げ，簡単に説明する。

(1) 特定の声調に起きる末位変調

韓江流域（潮州市内・東鳳鎮・澄海区内）及び榕江流域の一部（砲台鎮）では，末位音節声調がT3であり，先行する声調はT3，T5，T7である場合，以下の変調が生起する。（澄海区内を例とする）

①T3［53］＋T3［53］→T4［35］＋T3［312］
例：「□鼠」（ネズミ）
ŋiau^{53} tsʰɯ^{53}→ŋiau^{35} tsʰɯ^{312}

②T5［213］＋T3［53］→T3［42］＋T3［312］
例：「戏囝」（役者）
hi^{213} kĩã^{53}→hi^{42} kĩã^{312}

③T7［2］＋T3［53］→T8［5］＋T3［312］
例：「竹笋」（竹の子）
tek^{2} suŋ^{53}→tek^{5} suŋ^{312}

このような変調では，非末位音節声調と末位音節声調は同時に変調する。非末位音節声調は上述した変調規則に従って変調し，末位音節声調のT3はすべて［312］になる。但し，末位で［312］が現われるのは，上の三例のように，先行する非末位音節がT3，T5，T7の場合だけである。

（2）特定の単語に起きる末位変調

例：汕頭市内 「前日」（一昨日）

T2［55］＋T8［5］→T2［55］＋T8［1］

tsõĩ^{55} dzik^{5}→tsõĩ^{55} dzik^{1}

この例では，非末位音節声調が変調せず，末位音節声調が変調する。末位音節声調は変調して低調（低平板調又は低下降調）になる。このような変調は北京語の軽声に似ている。

しかし，末位音節声調の具体的な状況はどうだろうか。今後は，末位音節声調の変調についても検討したい。

【注】

1）普寧市は，以前は普寧県と呼ばれ，揭揚市に属した。1993年，県級市になっている。県級市とは，大行政区である「市」の下位にあり，県と同レベルの市のことである。

【参考文献】

張盛裕 「潮陽方言的連読変調」『方言』，1979－2，pp. 93～121；1980－2，pp. 123～136.

張暁山 「潮州話的声調」『韓山師専学報』，1989，pp. 118～126.

林倫倫 「潮汕方言声調研究」『語文研究』，1995－1，pp. 52～59.

施其生 『現代漢語方言音庫――汕頭話音档』，上海教育出版社，1997.

羅志海 『海豊方言詞典』，新疆人民出版社，2000.

岩田礼 「中国語の声調とアクセント」『音声研究』，2001－5，pp. 18～27.